

養蚕と甲斐絹

都留郡は山間部独特の狭隘な農村地域であったため、畔に桑や漆を植え、蚕を飼って絹や紬などの織物の生産により暮らしを立てていました。古くは天正十八

年（一五九〇）、徳川氏が抱えた中間衆が郡内の村々へ立ち入り、絹類をはじめ甲州の品々を買って江戸で売りさばいたといわれています。

また、井原西鶴の『好色一代男』（貞享元年（一六八四））や『好色五人女』（貞享三年（一六八六））などにも、「郡内縞」が登場しており、貞享・元禄・享保という江戸時代中期には「郡内縞」「郡内縞」は、江戸や京都、大阪などの大都市に広く知られていたことがうかがえます。

さらに、享保十七年（一七三二）の検地の折りに甲州郡内を回った役人が書いた『甲州新』の中には、「白絹の上は真木・花咲、菱絹は小形山、縞の類は上下谷村、海黄は田野倉、八反掛は新倉、玉川紬は松山、夏はかま地などは暮地・小沼などから織り出すものが上品である」と郡内の織物の産地が紹介されています。その中の「郡内平」と呼ばれる夏はかま地は、秋元家の内職として盛んに織られていたものが郡内農村に広がり、生産技術向上につながったと考えられます。

このほかにも秋元氏は上州より栽桑・織機の技術を導入し、郡内絹織物産業の改良・振興を図り、郡内から一年間に織り出す絹足数は七万疋、その販売額は五



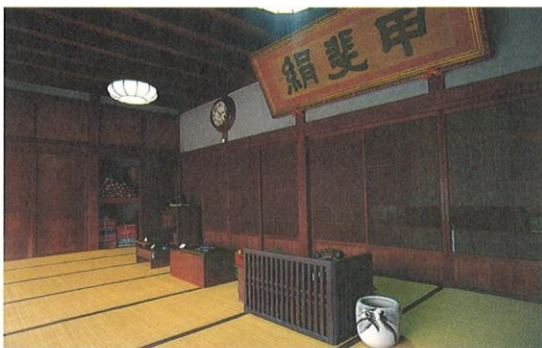
もに、江戸中期に中国産生糸の輸入制限策による国内の蚕糸業の発展と、都市の人口増加による田舎絹織物の需要増大があげられます。

江戸では郡内縞や郡内縞が庶民の人気を集め、越後屋、大丸屋、白木屋のような江戸の大商店は仕入を行う「買宿」を谷村に置いて買い付けを行っていました。こうした「買宿」をはじめ絹問屋や仲買人が出現し、村を回って絹を買い集める「場造」なども活躍しました。

万八千両にのぼる一大生産地にまで発展を遂げています（『上野原町誌 上』に収録された「渡世書」一七七五）。当時、

郡内では絹織物を生産し、それを他国や他地域へ販売し、その販売代金で他国から穀物・酒・茶などの食料品、木綿などの衣料品、生活必需品、そして養蚕・絹織物生産に必要な蚕種・藍玉、蒨などを購入するといった再生産構造が一般的でした。すなわち、他国との商品交換がなくては、郡内の人々の暮らしは成り立たないほど、絹織物生産に依存していたということとなります。実際、郡内のほとんどの農家が養蚕業を営み、繭から生糸を挽いてその生糸で絹を織っていました。

これほどまでに郡内の絹織物生産が発展した背景には、領主秋元氏の奨励とと



●旧仁科住宅（都留市商家資料館）

奥行き深い屋敷地が谷村城下町時代に行われた町家屋敷地割りの名残りを伝える仁科家は、代々郡内織（甲斐絹）を商ってきた絹問屋で、「げんかん」と呼ばれる通りに面した16畳の店先と積み荷の間が特徴になっている。平成5年1月18日に都留市有形文化財に指定され、商家資料館として一般公開されている。